

これからの工業高校について

文部科学省初等中等教育局参事官付教科調査官
 国立教育政策研究所教育課程研究センター

教育課程調査官 池 守 滋

1. はじめに

今日の我が国の経済的発展を根底で支えた製造業の技術・技能者は、多くが工業高校出身者であることは言うまでもない。今後も、資源のない我が国の産業・経済を支えるのは「ものづくり」を中心とする製造業であり、そこで働く人材を育成している工業高校は、これからも大きな役割を果たして行くと思われる。

本年は、工業高校への求人状況が昨年までより回復傾向にある。これは、中国経済や国内の情報家電の好調さを反映しており、生徒にとって先行きの明るい話題である。また、国においては「若者自立・挑戦プラン」の強化として、将来の地域社会の担い手となる専門的職業人を育成するのは専門高校と位置づけ、さまざまな施策を講じようとしており、専門高校への追い風を感じているところである。

しかし、このような明るい話題とともに、学校においては毎日の生徒指導の問題をはじめ、学校の在り方自体が問われる時代であり、さまざまな問題が山積していることも事実である。

ここで、現在の工業高校にお

ける現状をいくつか上げながら、新しい時代に対応した工業高校の重視すべき方向を探りたい。

2. 工業高校の現状についての認識と課題

学校基本調査速報によると、平成16年度の高校在籍者は約371万9千人であり、そのうち工業科の生徒数は約31万7千人と8.5%を占めており、普通科（72.8%）に次いで多い割合である。生徒数の割合としては、ここ10年間はほぼ一定であり、少子化がすすむ中、各都道府県において工業教育が重視されていることの現れであろう。

また、近年の少子化による生徒数減には、今まで、学級減や小学科の統廃合等に対応し

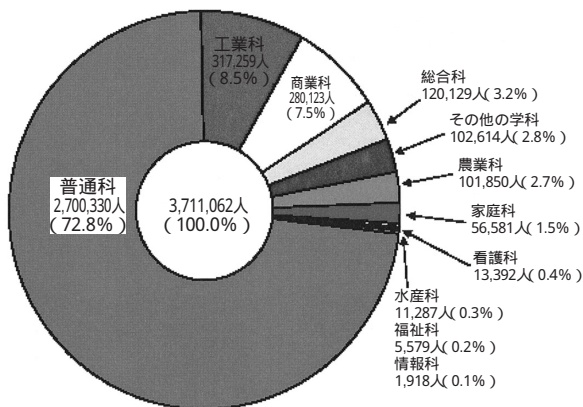
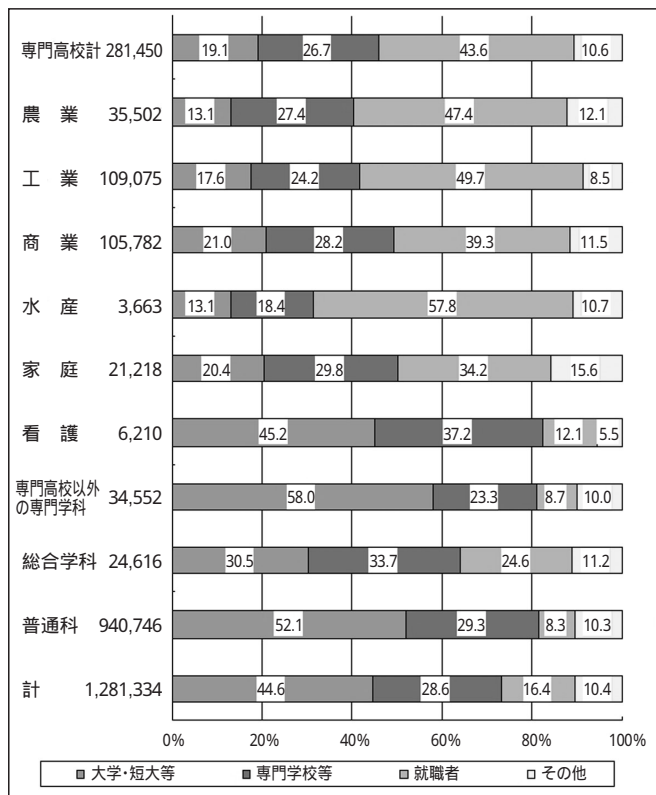


図1 高等学校の学科別生徒数（本科）



単位：人（％）

就職者には就職進学者は含まれない。（平成15年度学校基本調査）

おり、今後もこの傾向は続くものと思われる。

また、定時制においても工業科は全国の多くの高校に設置されている。近年、単位制の昼間定時制などの新しいタイプの学校が増えつつある。従来からの勤労青少年のための定時制教育から、多様な生活体験を持つ生徒や幅広い年齢層の生徒にも対応できる教育へ変わろうとしており、各学校がいろいろ努力している状況にある。

このような現状は、そのまま課題となる事柄であるが、あえて、次のような問いを考えてみた。

このような問いに、教員一人ひとりが自分自身の課題ととらえ、自信を持って答えられるように

工業科の生徒数及び学校数の推移 学校基本調査から

年	1993	1998	2003
全生徒数	5,003,314	4,250,518	3,801,646
工業科生徒数 (%)	438,081 (8.8)	375,326 (8.8)	329,991 (8.7)
工業科設置学校数 (単独工業高校)	698 (405)	684 (385)	648 (365)

てきた。今後は、周辺の高校などとの統合の時代に入っていることを認識する必要がある。

卒業後の進路状況では、進学者が増加傾向にある。「氷河期」ともいわれる厳しい就職状況とともに、大学等への全入時代を控えて

- どのような学校づくり、または、どのような生徒を育成するのか。
- 多様な生徒が入学する中、生徒の学力や意欲の低下等に対して対策を講じているか。
- 施設・設備の老朽化、産業の技術革新、技術の高度化に、どのような対応をしているのか。
- 学校で教えている内容と、地域の即戦力となるべく求められている内容は同一か。

していなくてはならない。

3．今後、重視すべきこと

今後の工業教育について、どのようなことを重視していくべきかを述べてみたい。

①地域から喜ばれる工業高校

現在は、全体に求められる力と地域の専門分野で活躍する人材に求められる力を、明確に分けて考える必要がある。また、「若者自立・挑戦プラン」において、『専門高校は地域社会の専門的職業人の育成を行う』とされたが、地域企業は勿論、地域の方々がどのような工業高校卒業生を望んでいるかを、もう一度見直す必要がある。それには、「地域から望まれる生徒像」というものを明らかにし、生徒が身に付けるべき学習内容を明確にする必要がある。さらに、専門の学習内容が実際の社会でどのように役立っているのか、社会において求められるコミュニケーション能力なども、きちんと整理しておく必要がある。

②教員が勤めがいのある学校

当たり前のことであるが、教員が勤めがいのない学校には、生徒も魅力を感じないし、校内の雰囲気も活気がない。

教員は、学校で生徒に専門教科をはじめ、さまざまなことを学ばせたり、生徒が将来社会に出たとき困らないように指導したりすることが仕事である。言い換えると、「将来のスペシャリスト」を「教えるプロフェッショナル」集団が専門高校である。そのためには、日々研修を重ねる必要がある。また、次代の中核となる教員の育成(全国の工業科教員は、

45歳以上が約52.7%を占めている。H13学校教員統計調査報告書の公立学校教員の工業専修・1種免許保持者から推計)も含め、研修を計画的に行う必要があるのではないかと。

4．おわりに

ここまで、私の教員経験と、さまざまな先生方からお聞きしたご意見等から述べさせていただいた。各地域に根ざした工業高校であるので、それぞれの学校ごとに抱えている課題や状況は、一つ一つ異なると思われる。また、現在は朝令暮改が当たり前というような変化の激しい時代であるため、学校を取り囲む状況も刻々と変わっていることも常に認識しておかなくてはならない。今、何をしたらよいのか、何をすべきなのかを、各自が、「間断なき見直し」を常に問う姿勢が必要である。これらのことは、工業高校ばかりでなく、小学校からの学校教育全体にいえることである。「あれがない、これが足りない」というだけでなく、与えられた条件・環境の中で最大限の成果を上げる努力をすることが大切であろう。

また、地域の要望によって設立された工業高校が数多くあるが、設立された当時と、地域の産業構造・就業構造が変化している中で、学科改編等により教育内容の見直しを行ってきた。大きな改編ばかりでなく、生徒や地域の変革に応じた学習内容になっているか、常に足元から見直す必要がある。今後も、卒業していく生徒が「工業高校で学んで良かった」また、地域の会社や市民が「○○工業高校の卒業生なら大丈夫だ」と言っていただけのような学校になっていただきたい。